

〔研究ノート〕

日清戦争の史料二、三について

原 田 敬 一 *

はじめに

日中戦争が、国内政治との関わりで究明されてきたのとは対照的に、日清戦争は、主に外交史として研究されてきた¹⁾。それらに共通しているのは、いつ、何のために、どのようにして戦争は始められたか、という視点であった。

確かに、戦争を歴史的に位置付けようとする場合、政治・外交・経済から緻密に分析することは重要である。しかし、より問題にしなければならないのは、戦争と民衆の関係ではないか。小論の場合で言えば、日清戦争がアジアの民衆に何をもたらしたか、である。外交も経済も重要な問題であるが、その戦争を通じて民衆は何を思い、どう変わっていくのか。そこに我々の求める戦争の実際の研究、社会史的探究が位置付けられる。

ここでは、そうした社会史的研究の前提として、いくつかの重要史料について検討を加えることをめざす。特に1と2の史料について述べるのが主旨であり、それ以外の史料と内容については別稿を用意している。

1. 参謀本部編『明治二十七八年日清戦史』について

* 佛敎大学総合研究所嘱託研究員

1) 戦前は、信夫清三郎『日清戦争』(1934年)、田保橋潔『日清戦役外交史の研究』(1944年脱稿、1951年刊行)、戦後に彭沢周『明治初期日韓清の研究』、山辺健太郎『日韓併合小史』(1966年)、中塚明『日清戦争の研究』(1968年)、藤村道生『日清戦争』(1973年)などがその主要な成果である。もちろん貿易などの経済史的意味も、南とく子「日清戦争と朝鮮貿易」(『歴史学研究』第149号)、梅溪昇・西村睦男・北村敬直・姜在彦「日清戦争」(『史林』35巻4号)などで考察されている。

最近、檜山幸夫「日清開戦と陸奥宗光の外交指導—国家意思決定問題を中心に—」(『政治経済史学』第300号、1991年6月)などの成果も発表されているが、その問題意識は、以上のものと共有されている。

戦争実態から検討するためにも、軍が作成した公式の戦史を欠かすわけにはいかない。日清戦争の場合、参謀本部編『明治二十七八年日清戦史』、軍令部編『明治二十七八年海戦史』の二つであるが、収集史料の関係上前者に限って述べる。まず全目次を掲げる。

- [第一卷] 第一篇 前記 第一章 戦争ノ起因／第二章 戦地ノ地理／第三章 清国軍／第四章 日本国軍
- 第二篇 日清両国ノ開戦 第五章 清国軍ノ情况／第六章 日本国軍ノ情况／第七章 在韓日清兵ノ接仗／第八章 日清両国ノ宣戦及其作戰計画
- [第二卷] 第三篇 朝鮮北部ノ作戰 第九章 平壤戦闘前日本軍ノ行動／第十章 平壤ノ戦闘／第十一章 第一軍ノ前進及艦隊ノ行動／第十二章 朝鮮北部清国軍ノ行動
- 第四篇 奉天省東南部ノ作戰 第十三章 鴨緑江畔ノ戦闘／第十四章 鳳凰城、大狐山地方ノ占領／第十五章 千山山地ニ於ケル小戦闘／第十六章 冬季守備中ノ戦況／第十七章 奉天省東南部清国軍ノ行動
- [第三卷] 第五篇 旅順半島ノ作戰 第十八章 第二軍ノ編成渡清及金州地方ノ占領／第十九章 旅順口ノ攻略／第二十章 軍ノ背後並ニ駐屯ノ情况及艦隊ノ行動／第二十一章 旅順半島清国軍ノ行動
- [第四卷] 第六篇 (上) 遼河平原ノ作戰 第二十二章 海城ノ占領／第二十三章 缸瓦寨ノ戦闘／第二十四章 蓋平ノ占領／第二十五章 海城ノ防守
- [第五卷] 第六篇 (下) 遼河平原ノ作戰 第二十六章 遼河平原ノ掃蕩／第二十七章 牛莊城ノ戦闘／第二十八章 太平山ノ戦闘及營口ノ占領／第二十九章 田庄台ノ戦闘／第三十章 遼河平原清国軍ノ行動
- [第六卷] 第七篇 山東半島ノ作戰 第三十一章 作戰軍ノ編成及榮城湾ノ上陸／第三十二章 威海衛ノ攻略／第三十三章 北洋水師ノ剿滅及山東軍ノ撤去／第三十四章 山東半島清国軍ノ行動
- 第八篇 南清及直隸ニ対スル作戰 第三十五章 澎湖島ノ占領／第三十六章 直隸平野作戰ノ準備
- 第九篇 平和克復 第三十七章 媾和／第三十八章 凱旋、復員及占領地守備

[第七巻] 第十篇 台湾ノ討伐 第三十九章 基隆、台北ノ占領／第四十章 台湾北部ノ戡定／第四十一章 南進軍ノ編成及台南ノ占領／第四十二章 台湾賊徒ノ行動

[第八巻] 第十一篇 軍ノ後方及内地ニ於ケル施設 第四十三章 兵站／第四十四章 運輸通信／第四十五章 補充／第四十六章 野戦給養／第四十七章 野戦衛生 附馬匹衛生／第四十八章 民政其他ノ施設

第十二篇 戦捷ノ淵源並ニ其結果 第四十九章 我国体ノ戦役ニ及ホシタル影響／第五十章 戦役ノ結果

以上の合計八巻が刊行される際、第一巻・第二巻はそれぞれ独立させたが、他は二冊ずつの合冊であるため、24点の地図を収めた別巻〔附図〕と合わせて、全6冊がその全体である。編纂は参謀本部、発行兼印刷所は東京印刷株式会社。第一巻の予約申込本部は育英舎（東京）だけだったが、第二巻で予約申込支部が北海道から沖縄県、台湾までにできた。そのいずれも小売書店と思われる。発行は、第一巻1904（明治37）年3月17日から始まり、第八巻1907年10月8日と続く。〔附図〕は奥付けを欠くが、筆者所蔵本には、大阪宝文館の明治41（1908）年のカレンダーが挟み込まれている。宝文館は、前記の予約申込支部の一つであり、恐らく1907年年末頃には〔附図〕を含めて全巻の配本を終わっていたものと推測される。

日露戦争の宣戦布告は1904年2月10日、陸軍先遣隊が仁川に上陸を開始するのはそれに先立つ2月8日、御前会議は2月4日に対ロシア交渉の打ち切りと軍事行動開始を決定している。この時代の印刷テンポが分からないが、1カ月半の時間があるので、新たなるこれらの戦争開始と『日清戦史』の公刊は連動しているかもしれない。日本近代最初の戦争を国際法に則って戦い抜いたという自負が軍にはあったはずだからである²⁾。

2) 外務省の認識として陸奥宗光の記録『蹇々録』から引用する。「今や欧米各国は我が軍隊の戦闘に勝利を得たるを目撃せる間に、日清交戦中において我が軍隊が採用したる欧州流の計画、運輸の方法、兵站の施設、病院および衛生の準備、特に慈恵の目的を主とする赤十字社員の進退等、百般の制度組織すこぶる整頓し、および各部の機関最も敏速に活動したるを看取し、また外交上および軍事上の行動においてその交戦国に対しならびに中立各国に対し、一も国際公法定規の外に逸出したる事なかりしを認めたるは、実に彼らに向かい非常の感覚を与えたるが如し」（中塚明校注、岩波文庫新訂版175頁、1983年）。陸奥は、ヨーロッパの国際秩序の範囲内で戦える日本軍を称賛しているのである。軍でも、「我政府ハ勉テ平和ノ方法ヲ以テ永ク韓国禍乱ノ根源ヲ絶タンコトヲ企望シ……最後ノ時機ニ至ルマテ尚ホ望ヲ平和ニ属シテ清廷ノ反省ヲ待テリ、然ルニ其行動ハ我企望ニ反シ我警告ヲ容レス敢テ大兵ヲ韓土ニ送り我ニ対シ明ニ抗敵ノ行為ヲ露ハシ遂ニ我軍艦ヲ要撃シ到底平和ノ手段ヲ以テ我国ノ権利ヲ保全スルコト能ハサラシム、因テ 天皇陛下ハ帝国憲法ノ定規ニ拠リ又万国公法ノ通則ヲ履ミ八月一日ヲ以テ左ノ宣戦詔勅ヲ発布シ給ヘリ」（前掲『日清戦史』第一巻170～171頁）と、清国の頑なな態度と、国際法に従った日本の宣戦を特記している。

本文だけで総計2721頁あり、それに「清国軍歩兵一営ノ編制」(第1巻付録第一)や「大本営首要職員」(同第九)、「混成旅団ノ任務ニ関スル命令」(同第十一)など表や公文書による「附録」が各巻に付けられ、別冊の「附図」以外に各巻にも多数の「挿図」が折り込みで付せられているから、まさに大部な歴史記録である。そうであっても、後に述べる多様な史料と比較することによって、何が描かれ、何が書かれなかったのかを明らかにし、そこから問題を考えていくことは可能であろう。

一つ例をあげれば、軍事統計としての欠陥である。第一巻第四章には、陸軍の「本戦役<台湾征討軍ヲ含ム>³⁾ニ参与セシ人員」として

将校同相当官 6766名／准士官下士官同相当官 2万3923名／兵卒 20万9927名
／合計24万0616名

の数字があげられ、次に

高等判任文官、雇員傭員6495名

を示し、「其他雇役軍夫十万以上ヲ使用セリ」と付け加えている(65頁)。しかし、第八巻第四十五章では「其他各部隊ノ編制上及補充ノ為メ竝ニ戦地ニ於ケル臨時ノ必要ニ因リ内地軍夫十五万三千九百七十四人ヲ傭役シ此外朝鮮、清国及台湾ニ於テ傭役セシ土人ヲ挙クレハ其延人員実ニ千二百一十一万人余ニ達セリ」(74頁)と、軍夫の従軍数は二つ記録されている。後者が正確だとしても、もう一つ問題がある。

第八巻附録第120は「減耗人員階級別一覧表」であり、軍人(将官・上長官・士官・准士官・下士・兵卒)と軍属(奏任文官・判任文官・雇員・傭人)に分類されている。それらの階級別に、死亡(戦死・傷死・病死・変死)、服役免除(傷痕・疾病・刑罰)が表になっている。それによれば軍人1万3164人、軍属324人の合計1万3488人がこの戦争で死亡したのである。しかし、この「一覧」には軍夫の欄はなく、軍夫の「減耗人員」は不明のままである。

「軍夫」は、国際法上非戦闘員として扱われ、戦闘部門に対し補給を行う兵站部門に従事した⁴⁾。近代日本の軍隊における兵站部門の脆弱さは、今日では一般に知られていることであるが、日清戦争の場合も例外ではなかった。制度的に輜重兵はあった

3) 以下、史料中に割注で書かれているものは、< >で表示して示す。

『日清戦史』第一巻第一頁は「日清ノ戦役ハ明治二十七年七月ニ起リ接仗ノ地、朝鮮中部ヨリ清国奉天、山東両省ヲ経テ澎湖列島ニ跨リ豊島、黄海及渤海湾口ノ海戦ヲ復ネ翌二十八年五月ニ終ル東亜未曾有ノ大戦争タリ」と記し、台湾征服戦争を含めていないが、本文では記録を収めている(第七巻)。

4) 軍夫が兵士でないのは明らかだが、軍属かどうかについては当時混乱していた。後掲の山県有朋の訓示は「軍属ノ部ニ列スル」としているが、『日清戦史』その他の記録や統計は、軍属に含めていない。

が、極端に少なく、実際には輜重兵の指揮の下に多数の人夫や馬を使役するしかなく、その人夫たちを「軍夫」と呼んだのである。軍の意識としては、従来の戦争でも人夫に依拠した兵站輸送を行っていたから、常識的な兵站形式だった。幕末の長州戦争の場合も、町夫や村夫の名で各藩は人夫使役を行っている⁵⁾。西南戦争でも、政府軍、西郷軍ともに人夫を多数採用している⁶⁾。

公式戦史から見捨てられた軍夫⁷⁾は、不思議な存在でもあった。兵站部門の主力であるので、出征した各師団はすべて軍夫を雇用したから、全国各地から広く参加することになった。国際法を意識したため、公式には戦闘との関わりを拒否され、それでありながら戦闘のいくつかの場面に登場せざるを得ないという、兵士とは異なった戦争体験と戦争観を持った存在である。さらに、日清戦後には軍夫補償問題が起きているが、あまり注目されていない。

無味乾燥な『戦史』であり、目次にあるように戦闘の記述が主だが、その中に朝鮮・中国の民衆や軍夫に関わる記述が埋め込まれていることも、再検討の素材となる。以下、章ごとに示す（句読点は原文通りとし、アラビア数字の日付の付加、重要部分のゴシック化は引用者がおこなった）。

[第六章]

（6月24日）当時京城ニ於テハ清国人漸次舗店ヲ鎖シテ仁川ニ去リ便船毎ニ帰国シ形勢漸ク切迫ヲ現シ韓人ハ日本人ノ雇傭ヲ忌避シ或ハ日本軍隊ニ対シ妨害ヲ加フル者アリ（114頁）

（7月13日）且ツ清国南北両洋艦隊悉皆戦闘準備ヲ為セリトノ電報アリ加之韓民ハ清兵ノ入京ヲ信シ甚タ我ニ善カラス往々妨害ヲ与ヘントスルニ至リ（118頁）

[第七章]

（7月25日）旅団南進ノ兵力ハ戦闘員歩兵三千人＜歩兵十五中隊＞騎兵四十七騎、山砲八門ナリ而シテ行李輜重ニハ輜重卒及同輸卒ノ外多数ノ軍夫、韓人夫並ニ韓地徴発ノ牛馬多数ヲ混セリ（130頁）

（7月26日）前衛ハ是日午前諸隊到着セハ其編成ヲ完備シ若干前進スヘキ予定ナリシモ徴発ノ朝鮮人馬行軍ノ苦悩ニ懲リ概ネ＜歩兵第二十一聯隊第三大隊及野戦病院

5) 古田耕次「長州征伐における紀州藩農民の動向－在夫徴発をめぐる－」、『学芸』第5号（和歌山大学、1957年）など参照。

6) 政府軍の軍夫使用は、第一旅団会計部長だった川口武定の『従征日記』上下（青潮社覆刻、1988年）などからもうかがえる。

7) 軍夫の死傷者はほとんど統計的に残されていないのにたいし、「馬匹」は戦闘毎に「将校、下士卒」と並んで記録される（第四巻付録第六十一など）。

ハ一頭ヲ余シ其他悉皆>逃亡シタルカ為メ已ムヲ得ス水原ニ滞在シ再ヒ運搬力ヲ整備スルコトニ従事ス<是日力ヲ盡シテ集合シタル人馬ハ往々逃亡ヲ謀リ歩兵第二十一聯隊第三大隊ニ属スルモノ、如キハ皆逃亡シテ遂ニ翌日ノ出発ニ支障ヲ生シ大隊長古志正綱二十七日午前五時責ヲ引キ自盡スルニ至レリ> (131~2頁)

(8月2日) 旅団ハ翌二日午後五時半振威ヲ出発シ翌三日午前六時水原ニ到着シ此ニ露營ス沿道ノ韓民曩日ノ不遜ニ似ス箠食壺漿シテ我軍ヲ犒フ (156頁) / 混成旅団清兵掃蕩ノ為メ七月二十五日南進ノ途ニ上リシヨリ茲ニ十有二日其間地理ニ審ナラス輜重及ハサルコト屢ニシテ加フルニ三状ノ炎威石ヲ鑠シ軍旅ノ行動備サニ辛酸ヲ嘗メタリ、是レ独リ戦闘部隊ノミナラス、輜重司令部、衛生隊、野戦病院、軍用電信隊ノ如キモ此間皆諸種ノ事情ニ制セラレ頗ル困苦ヲ極メタリ (157頁)

[第九章]

(7月23日) 平壤ニハ未タ清兵ヲ見ス又大同江ニモ上陸ノ景況ナキモ韓民ハ一般ニ日本人ニ対シテ敵意ヲ表ストノ報告ヲ致シタリ (1頁)

是月下旬清兵漸次義州ヲ經由シ南下シテ平壤ニ近ツクヤ韓民其威ヲ藉リ公然日本人ニ反抗スルニ因リ去テ中和ニ退キ此ニ在テ其任務ヲ継続シ (2頁)

(8月初め) 黄州、中和等沿道ノ市府ハ切りニ米麦炭ヲ準備シ道路橋梁ヲ修築シ地方ノ朝鮮官民ハ一般ニ日本人ヲ敵視ス等ノ情況 (3頁)

(8月初め) 他ハ多クハ信憑シ難キ韓人ノ報告等ニ依テ其一端ヲ揣摩シ得ルニ過キス、其事実曖昧ニシテ報道モ亦迅速ナルヲ得サリキ (4頁)

(8月3日) 同夕下ノ関ニ於テ軍夫<元山、京城間ニハ兵站ノ設備ナシ、因テ行李、輜重ノ運搬ノ為メ此軍夫ヲ附シタリ>ヲ搭載セル運送船ト合シ (10頁)

(8月4日第三師団動員発令) 其目的地タル旅順半島ノ地形ヲ顧慮シ此動員ニ際シ師団輜重定制ノ駄馬編制ヲ徒歩車輛<約二駄分 (四十八貫乃至五十貫目) >ヲ積載シ軍夫三名乃至四名ヲシテ輓カシムル者>ニ改ムヘキヲ命シ師団ハ八月十四日其動員ヲ完結セリ然ルニ是日此師団ヲ朝鮮半島ニ使用スルニ決スルヤ大本營ハ徒歩車輛ヲ行ルニ適セサル該半島ノ地形ニ適合セシメンカ為メ再ヒ師団輜重ヲ駄馬編制<輜重兵大隊 (本部及三糧食縦列、一馬厰) 及兵站糧食縦列ノ為メニハ臨時ノ編制ヲ定メタリ>ニ復シ、野戦砲兵聯隊<本部及野砲二大隊、山砲一大隊>ノ野砲ヲ山砲ニ改メ、又兵站部用トシテ軍夫二千八百名、車輛一千ヲ編成セシムルコトヲ為シ二十四日陸軍大臣ハ之ヲ師団長ニ訓令シ遽ニ其改編ニ著手シ三十日辛ウシテ之ヲ完成セリ

初メ參謀本部ハ朝鮮半島ノ地形及交通ノ情況駄馬編制ノ軍隊ヲ行ルニ適セスト

信シ第五師団ノ混成旅団ヲ渡韓セシムルニ方リ勉メテ馬数ヲ減センカ為メ行李駄馬ヲ廃シ軍需品ハ総テ輜重輸卒及軍夫ヲシテ負担セシムルコト、為シ特ニ諸部隊ノ編制ヲ定メ後チ第五師団残部諸隊ノ行李及師団輜重モ亦皆此主旨ニ依リ臨時編制ヲ定メテ動員セリ然ルニ其後混成旅団作戰ノ実験ニ徴シ同半島ハ駄馬ノ運動ニ支障ヲ与ヘサルノミナラス反テ軍夫ヲ用フル運搬法ニ優ルモノ有ルヲ知り茲ニ第三師団ニ駄馬編制ヲ取ラシムルニ至レリ (17~18頁)

八月三十日第一師団ニ動員ヲ令セリ而シテ此師団ハ直隸平野ノ大決戦ニ用フヘキ予定ナリシカ故ニ輜重ヲ徒歩車輛編制ト為シ<第一師団長ハ八月六日之ニ関スル訓令ヲ受ケ徒歩車輛編制ニ基キ師団ノ動員ヲ計画シ置ケリ> (26頁)

(9月3日) 支隊ノ前進ニ当リ最モ顧慮ヲ要スヘキ糧食ノ補給ニ欠乏ナカラシメンカ為メ粟、稗等ヲ徵発シテ約七日ヲ支フルニ足ルヘキ糧食<砲兵隊及騎兵隊ノ馬糧トシテ携帯セル精米ニ代フルニ雜穀ヲ以テシ此精米(支隊全員ノ二日分ニ當ル)及曩ニ師団ヨリ追送ヲ受ケタル糧米二日分竝ニ大行李ノ糧食ヲ合シ七日分ヲ得タリ>ヲ得駄獸、韓人及運搬材料ヲ徵集シテ其前途ヲ規画シ<師団長モ亦兵站部員、韓人夫等ヲ遣ハシテ徵発運搬ノ業務ヲ補助セリ>補給上大ナル危険ニ瀕スルノ虞無キニ至レリ (57~58頁)

(9月14日) 此支隊ニハ元來衛生隊無カリシニ因リ支隊長ハ曩ニ支隊新溪滯在中徵發勤務補助ノ為メ第五師団長ヨリ派遣セラレシ警部川上親賢ヲ以テ仮リニ担架隊長ト為シ之ニ巡查十五名、軍夫六十名ヲ附シ隊附軍医<一等軍医岡安得太郎、同部築宗正>及衛生部下士以下若干名ヲ合シテ臨時衛生隊ヲ編成シタリ (63頁)

(9月13日) <是日前衛ハ此小流ノ渡河ニ窮シ殆ト遠ク迂回セサルヲ得サルノ状ニ在ルノ際適ニ師団ノ糧食ヲ十二浦ヨリ留鶴洞ニ回漕ス可キ任務ヲ帯ヒタル工兵第二中隊ノ上等兵山本敬之助兵卒一名軍夫三名ヲ率テ此地ヲ航過セントシ前衛ノ窮状ヲ見独断直ニ糧食ヲ揚陸シテ其船ヲ前衛ノ渡河ニ供シ又昨日前衛ノ徵集シ在リタル小舟三隻ヲ以テ門橋ヲ作り繰網渡ヲ設ケ引続キ後続諸隊ヲ渡シ其行進ヲ遲滯セシメサルヲ得タリ> (89頁)

(9月14日) 以上ノ記事ハ平壤ナル一作戰目標ニ對シ第五師団長指揮下ノ四団隊カ実施シタル運動ノ概要ニ過キス然ルニ其行進ノ困難ナル言辞ヲ以テ名状シ能ハサルモノ有リ即チ沿道貧瘠ニシテ糧ニ其地ニ因ル能ハス、為メニ其大部分ハ之ヲ軍隊ノ後方ニ伴ハサルヲ得ス然ルニ其運搬ニ要スル多数ノ軍夫ハ到底悉ク之ヲ内地ヨリ送致シ得サルモノ有リテ多ク韓人ノ力ヲ仮ラサル可カラス元來韓民ノ怯懦ナル軍隊ノ通過ヲ見レハ輒チ遠ク離散シ辛ウシテ使役シ得タル者モ紀律ナク信守ナク

甚タシキハ我工兵カ道路工事ノ為メニ使用セル爆薬ノ爆声ヲ聞キ戦闘ト誤認シー隊ノ人夫拳テ山中ニ逃避シ戦闘員ヲシテ代テ牛馬ヲ牽キ軍需ヲ荷担セシムルヲ要シ或ハ糧食ノ定量ヲ殺キテ他日ノ緩急ニ備ヘ或ハ菽粟ヲ嚙ミテ纔ニ飢餓ヲ免ル、ヲ得ルニ至レリ、殊ニ道路ノ險峻ナル往々駄獣ノ通過ヲ許サス加フルニ日中ニ於ケル炎暑ハ夜間ニ於ケル濕冷ト共ニ大ニ健康ヲ害シ病ニ罹ル者亦尠カラス、然ルニ將士ハ能ク此艱苦ヲ忍ビ疲労ニ耐ヘ遂ニ平壤ノ四圍ニ近接スルヲ得タリ（93～94頁）／此間日本國ト攻守同盟ノ約ヲ結ヒタル朝鮮政府ハ力ヲ極メテ人馬ノ徵發ヲ助ケ官吏ヲ派出シ嚴重ナル政令ヲ布キテ國民ヲ督促セシモ該政府ノ威信ハ地ヲ掃ヒ殆ト命ニ応スル者ナク此手段モ亦恃ム可ラス是ニ於テ竹内兵站監ハ京城附近ニ於テ大ニ牛馬ヲ徵集シ之ヲ前送スルノ処置ヲ取り九月中旬マテノ間ニ前送セシ牛馬約一千頭ニ及ヘリ

又仁川居留民ハ此困難ヲ見テ二十名ノ義勇団ヲ出シ以テ韓軍夫ノ監督者ニ供シ京城居留民モ亦二十名ノ義勇団ヲ出セリ此朝鮮國語ニ通スル兩義勇団員ハ韓軍夫監督者トシテ大ニ便益ヲ与ヘタリ（94～95頁）／元山ヨリ平壤ニ至ル間約五十里道路險惡人烟稀疎ニシテ軍夫牛馬ノ徵集スヘキモノ甚タ少ク又糧食ノ徵發スヘキモノ殆ト絶無ナリ故ニ此兵站線路ニ於テモ亦糧秣竝ニ運搬力ハ悉ク元山ヨリ前送セサル可ラス元山支隊ノ前進スルヤ先ツ元山ト陽徳トノ間ニ兵站線路ヲ開設シ陽徳ニ糧秣ヲ集積セリ而シテ陽徳以西ハ支隊ノ前進スルニ隨ヒ逐次兵站線路ヲ延伸シ遂ニ成川ニ達セリ此地方ハ人民率ネ逃亡シテ軍夫ノ徵集スヘキモノ無ク纔ニ元山ヨリ派出セル朝鮮警察官吏ノ尽力ニ因リ陽徳附近ノ人民稍々復歸スルノ情況アリシト雖モ破邑以西ハ徵集ニ応スル者殆ト無ク日本軍夫モ亦過度ノ労働ニ服シ疾病ニ罹リ後送ヲ要スル者多ク駄牛モ亦多ク途中ニ斃レ糧秣ノ運搬徵集共ニ意ノ如ク行ハレス支隊ハ忽チ給養上ノ困難ニ陥レリ然レトモ幸ニシテ八月三十日ヨリ九月一日マテノ間ニ於テ二三回ノ降雨ニ遭ヒシ外毎日殆ト晴天ナリシ為メ陽徳地方山間ノ道路ノ淹沒破壊ヲ免レ糧食ノ前送ヲ杜絶シタルコト稀ニシテ遂ニ軍隊ヲシテ飢餓ヲ免レシムルヲ得タリ（96～97頁）

（平壤城陥落後）當時第五師団長ハ敵兵已ニ安州以北ニ退却セルヲ知り且ツ平壤ノ大捷ニ依リ朝鮮ノ人心我ニ畏服シ從テ糧食及軍夫ノ徵發從來ノ如ク困難ナラス（211頁）

（10月6日）軍司令官ハ前進中止ノ命令ヲ發シタル翌日＜六日＞在京城大島公使及在平壤外務書記官小村寿太郎＜第一軍附ニシテ臨時外交事務取扱者タリ＞ニ電報シ朝鮮政府ヲシテ糧食運搬ノ為メ責任ヲ以テ人夫牛馬ヲ徵集シ兵站部ノ需要ヲ飽足

セシムヘキコト及日本銀貨ノ通用ヲ布達スヘキコトヲ厳談セシメ (229頁)

(10月8日) 軍司令官ハ……大本営ニ向ヒ報告ヲ為セリ其要旨ニ曰ク糧食ノ運搬最モ困難ヲ極メ軍隊ヲシテ之ヲ運搬セシムルノ已ムヲ得サルニ至レリ海軍ノ助力ニ依リ龍川附近ニ揚陸地ヲ発見シ汽船ヲ回航セシメシモ未タ其報告ヲ得ス又平壤ハ敵兵多ク軍需品ヲ徴発シ殊ニ敗兵ハ人民ヲ殺戮シ或ハ家屋ヲ焼燬シ其資源ヲ奪掠セシ後チナレハ物資ノ欠乏、運搬ノ困難実ニ想像外ニ在リ加フルニ寒気俄ニ増加シ病兵亦随テ多シ成ルヘク速ニ人夫一万人、駄馬二千頭、車二千輛ヲ送付シ且ツ糧秣竝ニ冬営材料及防寒被服ヲ龍川附近ニ蓄積アラシムコトヲ請フト (229~230頁) / 塩屋兵站監ハ軍司令官ヨリ上述ノ命令<毎日五百石ノ糧秣及副食物ノ前送>ヲ受ケ爾來百方手段<韓軍夫及既著ノ徒歩車輛等ヲ使用ス>ヲ尽シテ運搬ニ従事セリ (230頁)

[第十四章]

(11月1日) 今ヤ軍ハ大兵ヲ鳳凰城方面ニ用フルヲ廃ス随テ糧食運搬ノ困難著シク軽減シタルト雖モ地方ノ物資ハ清兵ノ使用スル所ト為リ土民ハ戦闘ヲ恐レテ四方ニ離散シ混成立見旅団ノ給養モ亦容易ノ業ニ非ス元來第五師団ノ縦列<不定規ノ動員ヲ行ヒ出戦シタル結果是時迄ハ唯ゞ糧食一縦列ノミヲ有シ外ニ臨時輜重隊即チ地方徴発ノ人馬ヲ以テ編成スヘキ縦列幹部若干(已ニ之ヲ用ヒ九月一日仮リニ第二糧食縦列ヲ編成シタルモ固有ノ糧食縦列ノ人馬モ為メニ削減シ兩縦列共師団一日分ノ糧食運搬力無カリキ) 及一ノ輜重監視隊ヲ有シタルニ過キス>ハ人夫編制ニシテ而カモ其人馬大ニ減耗シ (370~371頁)

[第十五章]

(11月初旬) 初メ混成立見旅団ノ鳳凰城ニ入ルヤ先ツ敵ノ該城内外ニ遺棄セル兵器、彈藥、錢穀其他ノ軍需品ヲ押収シ城内ニ倉庫ヲ開設シ徴発委員ヲ組織シ<歩兵少佐佐原重雄ヲ其委員長ト為ス>徴発ヲ実施セシメ土民ヲ綏撫シ該城ノ紳商ヲ諭シ各々其堵ニ安ンセシメ又鳳凰城南門外ニ善後局ヲ開設シ其附近ナル龍鳳寺門前ニ市ヲ開カシメ又將校三名ニ下士卒若干ヲ附シ仮リニ憲兵ノ任務ヲ執ラシメ風紀軍紀ヲ取締ラシメタルニ因リ鳳凰城附近ノ人民皆風ヲ望ミ悦服シ未タ旬日ナラスシテ糧秣、薪炭、牛馬、鶏豚ノ類ヨリ支那車輛ニ至ル迄一日要求ヲ充タスニ至レリ (411~412頁)

(11月15日) 第五師団長野津中将ハ……賽馬集附近ニ多数ノ敵兵集团在ルコトヲ察知シ此敵ヲ擊攘シ以テ我警戒線前ニ立脚地ナカラシメ且ツ地方人民ニ示威シテ再ヒ我ニ背クノ念ヲ絶タシメント欲シ (434頁)

(12月初め) 初メ富岡支隊ノ連山関附近ニ在ルヤ給養ハ総テ鳳凰城倉庫ニ仰カサル可
ラス乃チ雪裡站ニハ仮倉庫ヲ設立シ通遠堡ニハ集積所ヲ設ケ鳳凰城、雪裡站間ハ
支那荷車ヲ以テ、雪裡站、通遠堡間ハ縦列軍夫ヲ以テ、通遠堡、連山関間ハ隊附
軍夫ヲ以テ糧食ヲ運搬シ其第一区ノ運搬ハ稍々其需用ヲ充シタリト雖モ第二、第
三区ノ運搬ニ至テハ患者発生等ノ為メ一日運搬力ヲ減少シ通遠堡糧秣集積所ノ
如キハ糧食品ノ全ク欠乏セシコト屢々ナリキ故ニ支隊ハ一日モ完全ナル給養ヲ受
ケシコト無ク各兵ハ非常ノ艱苦ヲ嘗メタリ加之寒威ハ日ニ凜冽ヲ加ヘ家屋乏シキ
ヲ以テ賽馬集攻撃ニ従事セル諸隊ノ将卒ハ焚火ヲ以テ温ヲ取り纔ニ睡眠スルヲ得
タルノミ被服ハ普通ノ絨衣袴、外套ニシテ布片ヲ以テ耳朶ヲ掩ヒ或ハ手袋ヲ用ヒ
辛ウシテ勤務ニ服セリ (457頁)

西島支隊ニ付屬セシ臨時編成ノ糧食縦列<第二砲兵彈藥縦列>ハ十月二十五日支隊
ノ香爐溝嶺ヲ発シテ大水溝ニ宿營セシ時其一半ノ失踪セシニ因リ全部ハ支隊ニ跟
隨セス支隊ハ是日ヨリ給養上大ニ困難ヲ嘗メ二十八日辛ウシテ賽馬集ニ達セリ幸
ニ是夜八時鳳凰城ヨリ支隊ニ二日分ノ糧食ヲ輸送シ来リタルニ因リ<第五師団長
ノ立見少将ニ命シ西島支隊ノ為メ編成セル臨時輜重縦列ノ齎セシモノ>纔ニ給養
ヲ維持スルヲ得タリ夫レ此支隊ノ糧食縦列<長、砲兵大尉大村一三>ハ二十五日
午後七時三道溝ヲ前進中敵ノ斥候ニ遇ヒシニ因リ警戒ヲ嚴ニシツ、行進中遂ニ路
ヲ失シテ本道ノ右ニ入レリ時ニ降雨甚シク暗夜且ツ道路險惡ナル為メ縦列ノ中央
後ヨリ両斷シ互ニ相失セリ此失踪セル縦列ノ一部<軍夫約二百名駄馬約十頭>ハ
二十七日香爐溝嶺ノ守備地ニ迷ヒ出テ該地ノ守備隊ヨリ一分隊ノ援助ヲ得昼夜兼
行シテ二十八日午後四時二十分辛ウシテ寬甸ニ到著シ縦列長ノ指揮下ニ復帰セリ
是ニ於テ縦列ハ始メテ完全ト為リ十二月一日午前十一時賽馬集ナル西島支隊ニ追
及スルヲ得タリ (469~470頁)

大迫少将ハ第三師団長ヨリ受ケタル内訓<岫巖ヲ占領セハ同地ニ糧食ヲ蓄積シ他日北
進ノ用ニ供スヘキ意味>ニ依リ岫巖ニ糧食ヲ蓄積セントセシモ奈何セン同地占領
ノ初メハ其守備隊ノ給養スラ全ウスル能ハス為メニ守備兵力ヲ消極的ニ減却セサ
ル可ラサル景況ナリシカハ当分之ヲ実施スルコト能ハサリキ之ニ反シ少将ハ却テ
先ツ守備隊ノ給養ニ焦慮シタリ即チ支隊ニ続行セシメタル第二及第三糧食縦列ノ
各半部ヲ賈家店及溝連阿ノ二箇所ニ置キ又歩兵彈藥四分一縦列ヲ土門子嶺附近ニ
置キ其駄馬及軍夫ヲ以テ糧秣ノ輸送ヲ為サシメ又大孤山ヨリ土城子迄ハ地方ノ牛
馬ヲ雇役シテ十九日ヨリ其運搬ヲ開始シ又一方ニ於テハ守備隊長<塚本大佐>ニ
命シ為シ得ル限り地方ノ物資ヲ徵集シテ其地ニ蓄積セシムルノ手段ヲ取ラシメタ

り」塚本大佐ハ此主旨ニ基キ其後岫巖城内ニ倉庫ヲ設ケ地方名望家ヲ招キ附近ノ村落ニ諭告シ市場ヲ開設セシメ売買ヲ自由ニスル等勉メテ人民ヲ慰撫スルノ手段ヲ取りシニ因リ避難民漸次帰住シ商品モ日ヲ逐フテ増加シ遂ニ数里外ヨリモ物資輻輳スルニ至リ從テ岫巖ニ於ケル糧食品集収ハ稍々其緒ニ就キシカ大孤山ヨリスル運搬ハ是時尚ホ未タ充分ナラス因テ少將ハ二十二日ニ去ル十八日大東溝ヨリ到著シ在リシ歩兵第六聯隊第七中隊＜長、大尉牧野留五郎＞ヲ該地ニ派遣シ為シ得ル限り地方ノ運搬材料ヲ蒐集シテ之ヲ用ヒシメ且ツ大孤山、岫巖間ニ於ケル運搬ヲ監視セシムルコト、為セリ恁クテ岫巖占領ノ初メ給養困難ノ極点ニ在リシ守備隊ハ遂ニ此難境ヲ脱スルヲ得タリ（495～496頁）

[第十六章]

（2月3日）栗子園東北方老辺牆附近ニ於テ我糧食運搬ノ**軍夫**ハ土兵三十余名ヨリ襲撃ヲ受ケ我**軍夫五名殺害**セラレタルコト有ルノミ（572頁）

（3月3日）西島大佐ハ九連城ニ於テ臨時山砲隊＜是日義州ヨリ到著セシ輜重隊ノ**軍夫七十四名**ヲ砲廠監視隊長砲兵中尉浅井一元ニ交付シ山砲三門（彈藥一門ニ付二百発）ノ一隊ヲ作ル＞ヲ編成セシメタリ（579頁）

【執筆者注記】西島助義大佐（歩兵第十一聯隊長）は、九連城守備隊長で、自ら第二大隊・臨時編成の山砲隊・衛生隊を率いて、3月11日灣甸子攻撃を行った。

是ヨリ先キ立見少將ハ第五師団ノ**補充軍夫百二十六名**第九旅団下士以下四十六名及其他ノ**軍夫百二十四名**ノ一団ヲ憲兵曹長花井策太郎ニ引率セシメ師団ニ追及ノ為メ二月二十七日鳳凰城ヲ出発セシメタリ然ルニ此一行二十八日午前十一時四十分頃赫家堡子附近ニ達スルヤ敵ノ騎兵四五十、歩兵四五十ニ遭遇シ辛ウシテ之ヲ撃退セシモ此地ヨリ十五清里後方ニ敵ノ歩、騎兵七八百屯在シ尚ホ進路ノ右側方約六里ナル四門子ニモ歩兵約五百、砲数門アルコトヲ諜知シ其独力前進スルノ難キヲ察シ徹夜退却シ翌三月一日午前三時半鳳凰城ニ帰著セリ少將乃チ右ノ補充兵ヲ九連城ニ派遣シ西島大佐ノ令下ニ属セシメタリ（589～590頁）

第五師団ノ首部鞍山站ニ向ヒ前進スルニ際シ一時鳳凰城ニ残留セシメラレタル同師団法官部、獣医部、金櫃部及馬廠ハ師団長ノ命令ニ因リ三月十五日護衛歩兵若干ヲ附シ曩ニ護送ノ目的ヲ達セスシテ鳳凰城ニ滞在シツ、在ル**軍夫百二十余名**ト共ニ海城ニ送遣セラレタリ但シ今回ハ路ヲ岫巖、析木城方向ニ取り無事海城ニ到著セリ（591頁）

（付録第二十五）明治二十七年九月十五、六日平壤戰闘死傷表

死亡：將校8，下士兵卒172／負傷：將校28，下士卒478／失踪：下士兵卒12

備考：二，表外朔寧支隊ノ臨時編成シタル糧食縦列ニ人夫一名ノ死者アリ

三，歩兵第十八聯隊ノ下士卒死者三十四名ノ内聯隊本部ノ人夫一名，外順安
守備隊ノ兵卒死者一名ヲ含有ス

五，師団司令部下士卒死者一名ハ馬丁ニシテ工兵第五大隊ノ死者一名竝ニ傷
者一名ハ共ニ人夫ナリ

(付録第二十九) 第一軍司令官陸軍大将伯爵山県有朋ノ訓示(引用者注記：明治27年
10月22日義州攻撃を下令した際，「尚ホ軍司令官ハ部下一般ニ訓示＜付録第二十
九＞ヲ下シテ戒飭スル所アリ」292頁)

今ヤ我軍將ニ鴨綠江ヲ渡リテ清国ノ疆内ニ入ラントス夫レ清国ト開戦以來已ニ数月ヲ
閱スト雖モ其戦タル単ニ朝鮮国内ニ於ケル清兵ヲ撃ツテ之ヲ破リ之ヲ卻ケタルノ
ミ長驅シテ清国ノ内地ニ入ルハ実ニ今回ヲ以テ始メトス乃チ茲ニ部下ノ士卒竝ニ
役夫ヲ警戒シテ大ニ其省慮ヲ要スルモノ有リ抑々今日ノ戦タル国ト国トノ戦ニシ
テ我軍ノ以テ敵トスル所ノモノハ則チ清国ノ軍隊ニ止マリ蚩々タル黎民ニ至リテ
ハ素ヨリ齒牙ニ掛クル所ニ非ス而シテ人民ノ家屋ヲ燒棄シ財物ヲ剽掠シ及婦女ヲ
羞辱スルカ如キハ嚴ニ万国公法ノ禁スル所ニシテ又文明国軍隊ノ決シテ為サル
所縱ヒ敵兵ニシテ公法ノ規矩ニ從ハス又文明国軍隊ニ反スルノ挙動アルモ我軍隊
ニ属スル者ハ決シテ暴ヲ以テ暴ニ代フルノ所為アル可ラス是レ我軍律ノ嚴禁スル
所ニシテ多年軍紀ノ下ニ養成セラレタル軍人精神ニ富ミ且ツ名誉ヲ重ンスル我軍
隊ハ上將校ヨリ下士卒ニ至ルマテ悉ク能ク之ヲ服膺シー人トシテ此嚴禁ヲ犯ス
者ナカルヘキハ深く信シテ疑ハサル所ナリト雖モ万一不幸ニシテ之ヲ犯ス者アル
ニ於テハ軍人トシテノ名誉ヲ毀損スルハ勿論実ニ軍隊ノ耻辱ニシテ又国家ノ耻辱
タリ且ツ夫レ不幸ニシテ此ノ如キコト有ルニ於テハ彼ノ人民ニ對シテ我軍隊ノ信
用ヲ失亡スルコト少カラス物品ノ徵發役夫ノ使用等ニ至ルマテ為メニ非常ノ困難
ヲ来タシ我軍隊ノ行動ニ容易ナラサル障礙ヲ発生スルヤ必セリ決シテ之ヲ假借ス
ルコト能ハサルナリ唯々最モ恐ル、所ハ則チ我軍ニ属スル役夫ニシテ彼等ハ固ヨ
リ教育アル者ニ非ス又規律ニ馴ルル者ニ非ス唯々賃錢ヲ目的トシテ從軍シタルニ
過キサルナリ而シテ其数ヲ問ヘハ則チ数万ノ多キニ及ヘリ是寔ニ軍隊ノ累ナリト
雖モ已ニ我軍隊ニ從ヒ来リ軍属ノ部ニ列スル以上ハ其猖行ハ則チ我軍隊ノ耻辱ニ
シテ又我国家ノ耻辱タリ総テ軍人ノ非行ト同一ノ結果ヲ生セサルヲ得ス故ニ役夫
ニシテ家屋ヲ燒棄シ財物ヲ剽掠シ婦女ヲ羞辱スルカ如キ者アルニ於テハ之ヲ嚴罰
ニ処スルコト勿論ナレトモ之カ監視ノ任ニ当ル者モ亦同シク之ヲシテ其責ニ任セ
シムヘキナリ我軍隊タル者深く此处ニ注意シ互ニ相警戒シテ道德及法律ノ罪人ヲ

出サ、ルヲ期スヘシ

以上ハ師団長ニ於テモ已ニ充分ノ注意アリ毫モ遺漏ナキヲ信スルト雖モ始メテ敵地ニ進入スルノ今日尚ホ一層ノ警戒アラントヲ切望スルナリ

(付録第三十二) 鳳凰城、義州間糧食運搬開始一覧表

【摘要】臨時糧食縦列トハ第三師団ノ大小架橋縦列ノ人馬竝ニ予備砲廠ノ軍夫ヲ以テ編成セシモノナリ／仮第一糧食縦列トハ第五師団第一、第二糧食縦列竝ニ第三師団第二兵站糧食縦列ノ第一半部ノ人馬ヲ合シ編成シタルモノナリ、仮第二糧食縦列トハ第五師団各部団隊ヨリ大小行李ノ人員竝ニ牛馬ヲ出サシメ輸卒二十二名、軍夫四百名、牛馬二百十頭ヲ以テ編成セシモノナリ／第一、第二、第三糧食縦列トハ仮ノ兩縦列ヲ解キ新ニ駄馬ノ三縦列ニ区分セシモノニシテ第三糧食縦列ハ幹部ノミニシテ運搬力ニ乏シ

[第十八章]

大本營ハ初メ第六師団＜八月六日動員ヲ了リ爾來九州ノ警備ニ任シ在リ＞ノ一半ヲ第一軍ニ増加スル予定ナリシニ因リ九月十六日ノ夜平壤ノ捷報ニ接スルヤ直ニ該師団長＜中將黒木為禎＞ニ電命スルニ混成第十二旅団及第六師団第一輜重監視隊＜軍夫七百四十名、徒歩車二百十輛属ス＞ヲ出戦ノ目的ヲ以テ小倉附近ニ集中シ輜重監視隊ハ小倉到著ノ時ヨリ該旅団長ノ令下ニ在ラシムヘキヲ以テセリ（4頁）

(10月26日) 軍司令官ハ二十六日前記ノ如キ上陸点ノ不良ナルヲ視察シ再ヒ有利ナル上陸点ヲ貔子窩附近ニ発見セント欲シ連合艦隊ニ照会シテ明二十七日筑紫、鳥海ノ兩艦＜軍參謀歩兵少佐神尾光臣、軍工兵部副官工兵大尉中村愛三之ニ搭乗ス＞ヲシテ貔子窩港ヲ偵察セシメ且ツ同地ニ揚陸セシムヘキ兵站司令部＜司令官、歩兵少佐太田貞固＞一個＜軍夫二十名ヲ属ス＞及歩兵一大隊ニ対スル十日分ノ糧秣ヲ積載セル支那船ヲ随航セシムルコト、為セリ（23頁）

[第十九章]

(11月15日) 軍司令官ハ金州城守備隊ヲ自己ノ直轄ト為シ大連灣守備隊ヲ軍兵站監工兵大佐古川宣嘗ノ指揮ニ属シ＜此兩守備隊ノ是ヨリ以後ノ行動ハ第二十章ニ詳ナリ＞又第一師団ノ大小架橋縦列ヲ同官ノ管轄ニ置キテ其軍夫三百十四名ヲ攻城廠ニ附属セシメ＜十七日ニ至リ更ニ第一師団馬廠ヲモ軍兵站監ノ管轄ニ属シタリ＞後備工兵第一中隊＜長、大尉笠川徳脩＞大連灣ニ到著セハ攻城廠長ノ指揮下ニ属スルコトヲ規定シ（90頁）

(11月19日) 攻城廠ハ午前七時其宿營地ヲ出發シタリシカ道路ノ不良ナルニ因リ縦列ノ彈藥数ヲ減シ＜中隊携行ノモノヲ合シテ一門五十發宛ト為ス＞其軍夫五百余名

ヲ取テ之ヲ各中隊ニ分属シ砲車ノ輓曳ニ助力セシメタルモ遂ニ予定宿营地タル長嶺子ニ達スル能ハス（111～112頁）

（11月22日）長嶺子ニ宿営シ在リシ混成第十二旅団ノ輜重＜歩兵弾薬縦列（八分ノ三欠）（左翼縦隊ニ派遣セラレタル八分ノ一ハ昨日帰還シ在リ）砲兵弾薬縦列（八分ノ一欠）糧食縦列＞ハ是日午前七時四五百ノ敗兵ニ襲ハレシカ士卒協力克ク防戦スルコト約三時間余ニシテ敗兵ハ遂ニ北方山地及双台溝方向ニ退走シタリ又之ト殆ト同時ニ土城子ニ在ル諸縦列＜混成第十二旅団ノ歩兵弾薬縦列八分ノ三、砲兵弾薬縦列八分ノ一、攻城砲廠第二縦列＞モ約四百余ノ敗兵ニ襲ハレ十時頃再ヒ三百余ノ敗兵ニ襲ハレタルモ遂ニ之ヲ撃退シタリ此等ノ敗兵約五六百ハ午前十時双台溝ヲ過キ兵站守備兵等ノ駆逐スル所ト為レリ（169頁）

[第二十章]

（11月20日）是時ニ於ケル兵站守備隊ハ尚ホ概ネ挿図第一即チ十九日ノ位置ニ在リ而シテ第一師団第二兵站糧食縦列，第六師団第一輜重監視隊（二分ノ一欠）及野戦砲廠ノ弾薬ハ三十里堡＜旅順街道上ノ＞ニ，第六師団第一輜重監視隊二分ノ一ハ王家屯ニ在リテ三十里堡ト双台溝間ノ運輸ニ任シ双台溝ニ新設セラルヘキ野戦砲廠中間廠ノ要員＜将校以下十三名，軍夫五百名＞ハ是日午前六時三十里堡ヲ出発セリ（190～191頁）

是ヨリ先キ金州城内ニ移転スヘキ命ヲ受ケタル歩兵第二聯隊本部及第一大隊ハ十二月七日，第二大隊ハ同十四日城内ニ移転シ又貔子窩ニ赴クヘキ歩兵第十五聯隊ハ上陸ノ際花園口ニ残置シタル追送品ノ到着ヲ待ツ為メ＜当時諸兵ノ靴ハ殆ト破損シテ其用ヲ為サス之カ補充ヲ要シタリ＞其出発大ニ遅延セシカ師団長ハ十二日之ニ第二野戦病院ノ半部ヲ加ヘ又臨時ニ弾薬大隊ヨリ縦列＜将校二，特務曹長一，将校相当官一，下士卒百六十四，軍夫六百十六名，車輛二百四輛＞ヲ出シ其荷物＜毛布其他大行李以外ノ荷物＞ノ運搬ニ任シタリ（230～231頁）

（12月12日）兵站監ハ第二軍司令官ヨリ第一軍ト連絡ノ為メ大孤山港迄電線ヲ架設スヘキ命ヲ受ケ之ヲ電信提理＜工兵少佐成沢知行＞ニ命シ而シテ貔子窩守備隊ニ増加スヘキ後備騎兵半小隊，莊河ニ派遣スヘキ患者休養所員，通訊官竝ニ特設縦列＜下士卒十名，軍夫四百六十五名，車輛百五十輛ニシテ兵站電信隊及電信掩護隊等ヲ給養セシムヘキ任ヲ有ス＞ヲ十二月十二日森田騎兵少尉ニ附シ貔子窩ニ向テ出発セシメタリ（232頁）

[第二十一章]

（11月21日）我攻撃スル所ト為リテ案子山堡壘団先ツ陥ルヤ志気大ニ阻喪シ守兵ノ一

部ハ東、西両海岸ニ沿フテ北方ニ遁逃シタルモ背水ノ形勢ハ其大部ヲ驅テ尚ホ白玉山ヨリ松樹山附近ノ堡壘団ニ亘ル線ニ拠テ抵抗ヲ繼續セシメタリ然ルニ二龍山、松樹山等相尋テ日本軍ノ奪略スル所ト為ルヤ諸隊潰乱シテ複タ收拾ス可ラス或ハ民船ニ投シテ海ニ逃レ或ハ附近ノ村落ニ入り戎衣ヲ解キ市民ヲ装ヒタル者甚タ多シ而シテ其大部ハ隙ヲ窺テ金州方向ニ走り窮鼠ノ勢ヲ以テ行々我兵站地ヲ侵襲シ遂ニ金州、大連灣地方ニ在リシ我守備兵ニ衝突シタリ而シテ姜桂題、徐邦道、張光前、程允和等ノ諸將モ亦敗兵ニ混シテ北走シ辛ウシテ金州地方ヲ經過シ後チ宋慶ノ軍ニ投シタリ（261～262頁）

（付録第四十六）十月十五日第二軍司令官ノ下セシ訓示

我軍ハ仁義ヲ以テ動キ文明ニ由テ戦フモノナリ、故ニ我軍ノ敵トスル所ハ敵国ノ軍隊ニシテ其一個人ニ非ス左レハ敵軍ニ当リテハ固ヨリ勇壮ナルヘシト雖モ其降人、俘虜、傷者ノ如キ我ニ抗敵セサル者ニ対シテハ之ヲ愛撫スヘキコト曩ニ陸軍大臣ヨリ訓示セラレタルカ如シ況テ敵国一般ノ人民ニ対シテハ最モ此注意ヲ体シ我妨害ヲ為サ、ル限リハ之ヲ遇スルニ仁愛ノ心ヲ以テスヘシ秋毫ノ微ト雖モ決シテ掠メ奪フコト有ル可ラス若シ其服食器具ノ類ニ於テ緊急所要アラハ相当ノ代価ヲ以テ之ヲ購買スヘシ到ル処勉メテ人民ヲ撫テ綏シテ安堵セシメ我恩德ニ懷カシムヘシ顧フニ我軍人ハ平素此等ノ教示ヲ受ケ善ク会得セルコトナレハ不法非義ノ舉動ナカルヘシト雖モ人夫等ニ至テハ予メ教養ヲ經タル者ニ非サレハ特別ニ注意シテ規律ニ服従セシムルヲ要ス若シ違ヒ犯ス者アラハ嚴罰ヲ以テ之ヲ処分シ決シテ宥赦スヘカラス今ヤ我軍將ニ本国ヲ離レテ敵地ニ赴カントス因テ特ニ訓示ス各団長ハ深く此主意ヲ体シテ部下ヲ戒飭シ我 天皇陛下ノ御仁德ヲシテ益々海外ニ昭明ナラシメ我軍隊ノ義心ヲ世界ニ發揮スヘシ

（付録第五十三）旅順口海岸砲台守備砲兵配賦表

計＝將校11，下士官42，兵卒295，人夫29.

〔第二十二章〕

（12月1日）第三師団長ハ命令ヲ下スト同時ニ部下一般ニ人夫ノ行状ヲ取締ルヘキ訓示ヲ与ヘ（13頁）

（12月20日）非常ノ努力ヲ以テ徹夜傷者ヲ收容シ翌朝ヨリ傷者ノ後送及死者ノ収集及其処置ニ従事セシカ傷者多数ニシテ距離遠ク運搬ニ要スル人員材料不足セシ為メ後送ノ業務又困難ヲ極メ衛生隊長＜輜重兵大尉莊司由修＞ハ大ニ心ヲ苦メ一方ニハ担架卒ヲシテ急造担架ヲ製造セシメ又一方ニハ海城ニ人ヲ派シテ援助隊ノ派遣及糧食ノ補給ヲ請求シ二十一日更ニ人夫百名及歩兵隊＜第十九聯隊第一大隊ヨリ

八十四名、同第二大隊ヨリ四十五名>ノ来援ニ会シ午後ニ至リ始メテ之ヲ結了スルヲ得タリ (126頁)

(12月21日) 直ニ兵站監ヲシテ後方勤務ノ計画ヲ立テシメ俄ニ兵站部員ヲ任命シ野戦砲廠其他当分使用セサル人夫車輛ヲ縦列ニ配当シ殊ニカヲ**地方人馬車輛**ノ徴集ニ致シ辛ウシテ漸次運搬力ヲ整フルコトヲ得タリ (140~141頁)

(附録第五十八) 第三師団ノ海城ニ向フ前進ニ関スル兵站設備要領

三、各兵站地ノ運搬力ハ専ラ**日本軍夫**及車輛ヲ収集シテ之ヲ用ヒ多少ノ不足ハ地方運搬力ヲ利用ス而シテ此**日本軍夫**車輛ハ目下当地ニ到著シツ、在ルニ因リ到著スルニ随ヒ之ヲ送附ス

[第三十一章]

(12月16日) 当時軍司令官ハ山東半島ノ地形及交通路ノ景況如何ニ就テ多ク知ル所ナカリシヲ以テ該半島尖ニ在ル荣城灣附近ヲ以テ上陸点ト假定シ此ヨリ威海衛ニ通スヘキ道路及此間ノ地形等ノ調査ヲ始メタルカーモ確實ナル準拠ト為スニ足ルモノ無ク只僅ニ地形ハ起伏甚シク積雪ハ往年嘗テ二尺ニ達シタルコト有リ殊ニ其道路ハ車輛ヲ通過セシムルノ望ナキヲ推知シ得タルニ過キス是ニ於テ軍司令官ハ断然車輛ヲ廢シ**軍夫**ヲ用フルニ決心シ (6頁)

(1月8日) 一月八日ニ至リ遂ニ第二、第六兩師団ハ同時ニ輸送スルコト、為レリ<軍司令官ハ新作戦ノ為メ新タニ**軍夫**一万人ノ増加ヲ大本營ニ請求セシカ兵站總監ハ其二千人ヲ増加シ尚ホ混成第十二旅団ニ附属セシ駄馬ヲ転用セシムルコトト為セリ> (9頁)

(1月16日) 一月十六日ニ至リ遂ニ臨時徒歩砲兵連隊ノ二個中隊<第三第六>ヲ以テ臨時徒歩砲兵大隊<長、少佐悦所篤文>ヲ編成セリ<材料ハ臨時攻城廠ニ属スル**軍夫**ヲシテ担荷セシム> (9頁)

[第三十五章]

(1月14日) 是ニ於テ直ニ混成支隊臨時編制<付録第六>ヲ定メ<糧食縦列ハ其要員ヲ司令部中ニ置キ独立ノ編成ヲ為サス又後備歩兵第十二聯隊第二大隊ハ旧編制ニ多少ノ変更ヲ加ヘタルノミニシテ新編制ノ発表ハ無カリキ而シテ附録第六ニ掲クル混成支隊ノ人馬數ハ其編成実施ノ際多少變更シ又司令部及彈藥縦列ニ属スル兵卒ノ大部ハ**傭役夫**ニ改メ支隊成立ノ時ニ於テ其総人員ハ五千五百零八名 (**傭役夫**一千五百七十二名ヲ含ム)、馬匹三十頭ヲ有セリ> (239~240頁)

此間混成支隊ハ既記ノ大本營訓令<二月十四日発令>ヲ受領セル後チ依然其位置ニ在リテ聯合艦隊ノ威海衛ヨリ帰航スルヲ待チシカ<比志島大佐ハ支隊ノ衛生隊ヲ有

セサルヲ以テ司令部ニ属スル人夫中百二十名ヲ選抜シ駐留中臨時ニ担架教育ヲ為シ又歩、砲兵隊ヲシテ専ラ射撃演習ヲ施行セシメタリ> (243~244頁)

- (4月30日) 因テ比志島大佐ハ直ニ列島ノ防備ヲ画策シ鹵獲兵器調査委員ニ命シ其海岸砲ノ外尚ホ野戦砲及小銃ノ修理ヲ為サシメ臨時山砲中隊ノ編成ヲ一時変更シ其人員ノ一部ヲ此頃既ニ整備ヲ畢リタル天南、拱北及漁翁島西嶼東、西二砲台ニ配置シ各砲台ハ将校若クハ曹長ヲ以テ其長トシ之ニ下士卒及軍夫ヲ属ス> (271頁)

[第三十八章]

- (9月1日) 九月一日甘泉堡ニ於テ日、清両国ノ捕虜ヲ交換セシメ<第四師団参謀砲兵中佐牟田敬九郎ハ第三師団海城駐守以来同地ニ収容シ在リシ清国ノ捕虜将校以下五百六十八名ヲ清国委員ニ交付シ我軍ノ捕虜十一名(歩兵第十二連隊ノ兵卒一名及第三、第五師団所属人夫十名)ヲ受領セリ> (343頁)

[第三十九章]

- (5月31日) 概ネ左ノ如ク其編制ヲ変更セリ……弾薬大隊ハ砲兵弾薬縦列ヲ廃シ歩兵弾薬ニ縦列ニ属スル人員ニ砲兵弾薬縦列一部ノ人員及兵站部附属ノ軍夫二百名ヲ加ヘ臨時弾薬縦列ト仮称シ之ヲ二梯隊ニ区分ス<第一梯隊ノ弾薬数ハ毎銃約二十発、第二梯隊ノ弾薬数ハ毎銃約七十発>、第一糧食縦列ハ固有ノ人員ニ兵站部附属ノ軍夫二百名ヲ増加ス (21頁)

[第四十章]

- (6月22日) 是日糧食輸送ノ貨車<軍夫之ヲ運転ス>ハ楊梅壠附近ニ於テ賊ノ要撃ニ遭ヒ (62頁)
- (7月22日) 山根支隊ノ首力<第二中隊(騎兵二名ヲ附ス)ヲ大嵯炭ニ、第三中隊、騎兵一小隊(約一分隊欠)工兵二分隊ヲ其対岸ニ駐メ協力シテ背後ノ掩護ニ任セシム>ハ第五<長代理、中尉宮永計太>第六<長代理、中尉井戸川辰三>中隊ヲ左右両側衛、第八中隊ノ一小隊<長、少尉丸野勝喜>ヲ前衛トシ二十二日朝出発<山根少将ハ進路ノ險惡ヲ顧慮シ大行李及馬匹ハ悉ク大嵯炭ニ留メ各自携帯口糧三日分歩兵ハ少クモ百五十発ノ弾薬ヲ携行セシメ砲兵並ニ衛生隊ノ駄馬ハ之ニ代フルニ軍夫ヲ以テセリ>尾藁庄高地ニ達シ (112~113頁)
- 以上四日ニ互ル各支隊行動ノ結果賊ヲ屠ルコト数百、家ヲ焼夷スルコト数千ニ及ヒ十三日以来兇焰ヲ逞フセル賊徒ハ一時全ク屏息スルニ至レリ (122~123頁)
- (8月23日) 当時風土病ノ為メ後方勤務ニ使用セル軍夫ノ減員多ク為メニ糧食ノ運搬意ノ如クナラス(167頁)

(8月27日) 是日ヨリ歩、砲彈藥各一縦列＜明日大行李ノ位置ニ集合スヘキ以外ノモノ＞ヲ大肚街ニ召致シ其**軍夫**ヲ工兵大隊、左翼隊及砲兵聯隊ニ配属シ架橋作業、砲兵材料及彈藥等ノ運搬ヲ補助セシメ (181頁)

[第四十一章]

(10月12日) 歩兵第五聯隊第三大隊ノ大行李モ布袋口ヨリ前進中賊ノ掩撃ヲ受ケ下士以下七名、**軍夫**三十名生死不明ト為リ行李ノ一部ヲ失ヘリ (262頁)

(10月11日) 後方勤務ノ状況ハ未タ其前進ヲ許サ、リキ、即チ近衛師団ニ在リテハ**軍役夫**ノ病ニ罹ル者十分ノ四ニ達シ諸縦列ノ運搬力大ニ減シ＜糧食縦列ノ如キ三縦列ヲ合シテ僅ニ一縦列ノ用ヲ為スニ過キス因テ彈藥縦列及大架橋縦列ノ運搬力ヲ集メテ糧秣ノ輸送ニ任セシモ不足セリ＞地方調弁ノ物資ヲ補助トシ纔ニ給養ヲ支持スルニ過キス又台湾兵站監＜少將比志島義輝＞ハ将来前進ノ為メ海路布袋口ニ糧食ヲ直送シ北掌溪河口新塢庄附近ニ兵站大倉庫ヲ、塩水港汎ニ支倉庫ヲ設ケ軍ノ前進ニ先タチ各々糧秣一師団半ノ二ヶ月分ヲ集積セントセシカ亦運搬力ノ欠乏＜兵站監ハ土人ヲ多ク使用スルノ計画ヲ為セシカ布袋口附近土民ノ反抗心強キ為メ齟齬セリ又北掌溪ノ筏ヲ通スルヲ偵知シ筏ヲ集メタルモ布袋口附近掃蕩ノ為メ焼夷セラレタリ＞ニ因リ之ヲ果サ、リキ

又第二師団ニ於テハ其作戰路海岸ニ接近シ船舶ヲ以テ糧秣ヲ直送スルノ便アルト地方人民比較的柔順ニシテ我雇役ニ応シタルトニ因リ今日迄給養ニ困難セサリシモ師団輜重ノ車輛編制ナルハ道路ノ状況ニ適合セサルヲ以テ既ニ車輛ヲ廢シ輓鞍ノ儘＜後チ仮駄鞍ヲ製シテ之ニ代ヘタリ＞馬匹ニ駄シ不足ハ彈藥縦列、臼砲中隊、砲廠部ノ**軍役夫**ヲ以テ補ヒ尚ホ各兵員ヲシテ背囊ヲ脱シ二日分ノ精米ヲ携帯セシムルノ已ムヲ得サルニ至レリ (300～301頁)

(10月22日) 臼砲中隊砲廠部ハ師団輜重及兵站ノ輸送力ヲ補フ為メ其**軍役夫**ノ全員ヲ挙テ糧秣ノ輸送ニ従事セシムルコト、為リ (334頁)

【附記】(明治29年 1月 1日) 是日午前二三百ノ賊後厝庄附近ニ群集シ台北城ニ向ヒ乱射ス兵站監台北ノ守備薄キヲ以テ新竹ニ在ル歩兵一中隊＜後備歩兵第十五大隊第一中隊(長、大尉下川佐一)＞ヲ召致シ＜汽車ニ由ラシム＞總督モ亦鹵獲山砲三門＜總督府員及人夫若干ヲ以テ編成シ砲兵部副官大尉公平忠吉之ヲ指揮ス＞ヲ兵站監ノ使用ニ属シタリ (347頁)

(附録第百八) 台湾討伐参与人馬概数

合計＝將校同相当官 1,519／下士卒 48,316／**傭役軍夫** 26,214／乘馬 4,920
／駄馬 1,591／輓馬 2,923

[第四十三章]

(明治27年6月) 当時混成旅団ノ輜重ハ輸送力乏シク殊ニ兵站地ノ運搬ハ一ニ地方ノ人員材料ニ依ラサル可ラス然ルニ朝鮮官吏等ハ其労働者ヲ脅迫シ我軍ノ雇役ニ応スルヲ妨ケ我居留民中ノ労働者モ亦其数寡少ニシテ僅ニ二三百名ヲ得ルニ過キサリキ因テ兵站監ハ屢々**軍夫**ノ増遣ヲ兵站總監ニ請求シタルモ其需要ヲ充タス能ハス<兵站總監中將川上操六ハ此請求ニ対シ**軍夫**三百名ヲ送り他ハ勉メテ地方ノ運搬力ニ頼ラシメタリ>我領事<釜山総領事室田義文仁川ニ来リ仁川領事能勢辰五郎ト共ニ協力セリ>ノ斡旋ニ依リ辛ウシテ若干ノ**軍夫**ヲ得又一面ニハ漢江ヲ利用シ水路輸送ヲ開キ纔ニ軍需品ノ追送ヲ為シ得タリ (2頁)

(8月4日) 大邱<九日開設>及尙州ニ兵站司令部ヲ派遣シ道路修理ノ為メ来著セル工兵第六大隊第一中隊<**軍夫**四百六十四名及石工五十一名ヲ附ス>ヲシテ釜山、京城間ノ道路修理ニ著手セシメタリ (4頁)

(9月1日) 大本營ハ第一軍戦闘序列ヲ令シ第三師団ヲ第五師団ニ加ヘ同軍ヲ編成シ軍兵站監部ハ三日其編成ヲ完結セリ<第三師団ノ編成シタル兵站部要員(兵站監部要員及兵站司令部四個)ニハ**軍夫**三千五百名及徒歩車一千輛ヲ附属セリ> (7頁)

(9月16日) 是日西海艦隊仁川ヲ発シ大同江ニ向フヤ兵站監ハ運送船ニ兵站司令部一個<**軍夫**三百名及糧食、彈藥共>ヲ搭載シ之ト同行セシム (8頁)

(10月5日) 既ニ先行団隊ハ糧食ノ欠乏ヲ告クルニ至レリ是ニ於テ軍司令官ハ已ムヲ得ス一時軍隊ヲ安州以南ニ停止シ軍司令部員ヲシテ兵站部ニ協力セシメ躬ラ其輸送ヲ督励シ又沿道軍隊ヲシテ悉ク其運搬ニ助力セシメ一面大本營ニ運搬力ノ増加ヲ請求セリ<兵站總監ハ軍ノ要求ニ依リ中路兵站監ノ為メ準備セル**軍夫**五百名、徒歩車五百輛ヲ第一軍兵站監部ニ送り更ニ**軍夫**二千五百名及徒歩車五百輛ヲ増加セリ> (10頁)

[第四十五章]

輜重兵器具材料ニ就テハ本戦役ノ開始前各輜重ノ定規編制ハ駄馬編制ナリシモ作戰地ノ關係ニ依リ殆ト臨時ノ編制ヲ採レリ即チ第一期ノ作戰間ニ於テ第五師団<大小架橋縦列及兵站糧食縦列ヲ除ク>ハ**軍夫**編制、自余ノ各師団ハ臨時車輛編制<徒歩車輛>ト為シ更ニ第三師団ハ駄馬編制ニ變更シ<出征前ニ於テ>又第五師団ハ輜重ノ一部ヲ駄馬編制ニ改メタリ<出征後>次テ第二期作戰準備ノ為メ各師団輜重ハ制式輜重車輛<一馬曳二輪車>編制ト為スコト、為リ、近衛、第四兩師団ハ出征前ニ於テ之ヲ編成シ第二、第六兩師団ハ出征地ニ於テ其編制替ヲ為シ第一、

第三師団ノ為ニハ其人馬材料ヲ金州半島ニ送致スルノ準備ニ在リシカ憐和成立ノ為メ其編制替ヲ実施スルニ至ラスシテ廃メリ (87頁)

兵站輜重<兵站糧食縦列ヲ除ク>ノ行李及輸送品ハ總テ徵發セシ人馬材料ヲ以テ運搬スルノ規定ナリシモ作戰地ノ情況ハ其要求ヲ充タス能ハサリシニ因リ此輜重<各師団トモ>ニ徒歩車輛<軍夫ハ車一両ニ三人半ノ比例ヲ以テ配賦セリ>ヲ属セリ (88頁)

[第四十七章] (隊属衛生員) 戦線傷者ノ運搬ハ補助担架卒及衛生隊ノ担架卒主トシテ之ニ任シ時ニ他ノ兵卒若クハ軍役夫ヲ以テ之ヲ補ヘリ (107頁)

外征軍としての兵站の困難 (第六章114頁, 第十五章434頁, 第四十五章87頁など), それでも強行される現地調達 (第七章132頁, 第九章58頁, 第四十三章 2頁など), とともに軍夫は兵站だけでなく, 衛生隊 (第九章63頁), 工兵隊 (第九章93頁), 山砲隊 (第十六章579頁, 第四十一章347頁), 攻城廠 (第十九章90頁) などの諸部門に従事している。そのような戦闘部門にも進出すると一層死傷者が増加するはずである。もちろん兵站だけに従事していても死傷の可能性はある。しかし, 軍事統計に表されたのは, 第二巻付録二十五の平壤戦だけである。ここに軍夫の問題があることは, 前述したとおりである。

2. 『日清戦争実記』について

日清戦争は, 近代日本最初の (国際法上の) 対外戦争であったため, 国民の関心も高く, 新聞は報道員を派遣して詳細な戦争・戦場状況の伝達に努めた。なかでも1887年 1月に開業したばかりの新興の出版社である博文館が刊行した『日清戦争実記』は, 初めて写真銅版を使用した報道雑誌として特筆される。これは月3回のテンポで, 開戦直後の1894 (明治27) 年8月25日発行の第1編から, 1896 (明治29) 年1月7日発行の第50編まで続けられた (1冊8銭, 毎号100頁以上, 変形A5版)。それ以外にも錦絵などの報道手段も使われた。細かな事実まで含めれば我々の再検討の課題になるものは多い。内容は, 第1編から戦局と共に次第に変化を遂げていったので, 安定した時期の第12編の目次を掲げてみる。

【第拾式編】

[口絵] 陸軍少将大寺安純君, 高雄艦, 呉衛戍病院治療室, 篤志看護貴夫人, など

[戦争実記] 旅順口陥落記, 金州後戦記, 井上公使の建策, など

- [史伝] 勇兵小野口徳次氏、露国東洋艦隊司令長官チールドフ中将、など
- [地理] 旅順口、清国の鉄道
- [文苑] 詩、歌、日記
- [軍人逸話] 黒田中将深夜六韜を講ず、粟谷少佐七度敵兵を敗る、など
- [軍事叢譚] 日清両国兵体格の比較、各国戦争の償金、など
- [海外評論] 英吉利、北米合衆国、伊太利、独逸、支那
- [国論一斑] デットリングの来朝と与論の激昂、川田博士の支那論、立憲革新党宣言書
- [戦事公報] 金鵄勲章叙賜条例、給与規則、東学党征討彙報、戦地死亡者人名、など
- [戦事私信] 金州劇戦の実況、安東県の場合、北進軍の場合、三谷中尉の書束、など
- [海外彙報] 英吉利、北米合衆国、伊太利、朝鮮、支那
- [海内彙報] 其他数件

一覧して明らかなように、この雑誌で日清戦争の全てが逐一分かるように構成されている。明治27年12月17日に発行されたこの第12号で既に「各国戦争の償金」が掲載されているのも驚くことだが、国民の意識を如実に浮かび上がらせていると言うべきであろう。この雑誌によって、軍国美談や国民意識などを分析することも可能であるし、必要なことである。

3. 行政資料・新聞・参加記などについて

兵士の動員は、市町村を通じて行われる。また軍資を得るために、日清戦争で初めて軍事公債が募集されたが、それも市町村のパイプによって応募者が集められた。軍事公債だけでなく、広く民衆から「軍費献納」が進められ、陸軍恤兵部などの軍事機関や、道府県・市町村宛にも献金や物資献納が続々と寄せられている。八月一日の「宣戦の大詔一び降るや神戸の民心も亦数層感激し軍費を献納する者多く」なった（『大阪毎日新聞』明治27.8.8）。神戸市役所の吏員は、俸給の2%を陸軍恤兵部に献納することを早々と決めている（『大阪毎日』明治27.8.7）。一般に日露戦争の場合、戦争の大規模化に見合って、行政資料などの残存度は大きいのだが、日清戦争の場合あまり残っていないと言われている。しかし、こうした動員、公債募集、献金、献品などに道府県・市町村が関与している程度は大きく、なんらかの史料が残されている可能性はあり、それを追究する必要がある。

報道機関の協力も積極的で、開戦直後『神戸又新日報』は、「遠征軍隊慰労奨金」

を呼びかけて、9月末には5442円89銭2厘を集めている（『大阪毎日』明治27.9.29）。『大阪毎日』社説「大に軍資を抛出すべし」は、「常に国家の擁護と人民の尊崇を受ける」華族や豪商などは「斯かる有事の時に当て豈に奮発一番大に資財を抛って以て奉公の誠を表せざる可けんや」と、大いなる献金を勧めた（明治27.8.8）。

前記『日清戦史』は、陸軍恤兵部に届けられた献金合計を220万9770円70銭5厘、献納人員216万4686人（ほかに評価額70万8634円33銭6厘分の寄贈品、寄贈人員94万9128人。別に外国人34人による献納金879円62銭5厘がある）と記録している（第八巻、143頁）。これらを地域で階層や動機などを確かめていく作業はまだ残っている。

『日清戦史』では、従軍した内地新聞社66、従軍僧侶55名（浄土真宗兩派、天台宗、真言宗、浄土宗、臨済宗、日蓮宗、曹洞宗）、従軍神官6名（蛟神社、金光教、神宮教）を数えている（第八巻140～141頁）。これらの宗派の主体的な関わりかたも未検討であろう。

4. 戦争文学について

「戦争文学」と言えば、日露戦争の際の「肉弾」や「此一戦」が取り上げられ、あたかも日露戦争の経験が国民の戦争体験として一般化され⁸⁾、第一次世界大戦（日本の場合は中国の青島と南洋諸島を戦場とした「日独戦役」として考えたほうが、国民意識として妥当であろう）や15年戦争まで維持されていたと思われる。

しかし、中世の軍記物を除けば、戦争を題材として取り上げた「戦争文学」は日清戦争から始まる。1894年9月国民新聞社に正式入社した国木田独歩は、すぐさま志願して海軍の従軍記者となり、10月中旬から翌年3月上旬まで軍艦千代田に乗り組み、「海軍従軍記」として『国民新聞』に通信を続けた。これが、独歩の没後、弟にあてた手紙の形を取った部分があることから『愛弟通信』と命名されて刊行されたものである（1908年11月、左久良書房）⁹⁾。そのほか、独歩最初の創作集である『武蔵野』（1901年3月）に収められた「置土産」（『太陽』1900年12月号）など、いくつかの作品をまとめた¹⁰⁾。開戦のころ、たまたま金沢に帰っていた泉鏡花も、金沢歩兵第七

8) 『戦争文学集』（改造社版『現代日本文学全集』第49篇、1928年）は、桜井忠温の「肉弾」「銃後」、水野広徳「此一戦」の三編を収録しているが、いずれも日露戦争に題材を取っている。木村毅編『明治戦争文学集』（筑摩書房版『明治文学全集』第97巻、1969年）も、「肉弾」「此一戦」に、波川玄耳「従軍三年」（抄）とレンガード「剣と恋」（抄）や、それ以外を加えているが、同じく日露戦争ものを基本としている。

9) 塩田良平「解説」、国木田独歩『愛弟通信』（岩波文庫、1940年）所収。

10) 塩田良平「解説」、国木田独歩『武蔵野』（岩波文庫、1939年）所収。

聯隊の見聞からこの戦争を記録し、『予備兵』や『海城発電』などの文学作品として遺した。

日清戦争は狭義の兵員の動員としては少なかったから、人々の体験談より、彼らの報道記事や文学作品を通じて、国民は日清戦争に触れたとも言える。そこには何が書かれ、民衆に何が伝えられたのか、十分再検討に値する課題である。

むすびにかえて

従来、日清戦争と日露戦争は、戦争の規模の違いが強調された。日露戦争が、100万人近い兵員の動員を行い、15億円以上の軍事費を使った「総力戦」とも呼ばれる国民的規模の前線・後方の戦争参加が見られたのに対し、日清戦争は24万人の動員で、軍事費も約2億円であり、国内に与えた影響も少ないとされた。しかし、軍夫に関わる諸問題をそこに付け加えたならば、日露戦争と日清戦争はそんなに大きな違いがあるだろうか。軍夫は15万人動員されたのだから、兵員に加えると約40万人となり、日露戦争の約半分になる。さらに、軍夫は15万人ではなく、一応、日清戦争15万4000人、台湾戦争2万6000人の合計18万人と考えることができようか。損害は兵員が明らかになっているだけで、軍夫については前述したように明確な軍事統計はない。こうした数字から考えても、近代最初の対外戦争として、民衆に与えた衝撃は大きかったと言えるのではないか。

本稿は検討すべき史料と課題を指摘したにとどまっており、今後〈民衆と日清戦争〉を考えていくための最初の一步に過ぎない。

〔付記〕本研究は、1993年度文部省科学研究費一般研究（C）「日清戦争の社会史的研究」、佛教大学総合研究所から各々助成を得ている。

小論の成立過程で、鷹陵史学会大会、佛教大学総合研究所「アジアのなかの日本」研究班で、それぞれ報告の機会を与えていただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

（佛教大学文学部助教授）